

涙流し子に伝えた母を受け継ぎ

藤森俊希
広島被爆
長野県茅野市

わたしは、1歳の時、広島の爆心地から2.3 km地点で被爆しました。

当時、わが家は祖父・父母・9人兄弟姉妹の12人家族でした。8月6日、わたしは体調を崩して母に背負われ病院に行く途中でした。川の土手の上を歩いていた母が、にぶい爆音を聞き、空襲かと身構えた瞬間、閃光が走り、猛烈な爆風が襲って母子とも土手の下に吹き飛ばされました。偶然にも爆心と親子の間に2階建て民家があり、熱線を直接受けることは免れました。

わたしを抱いて土手の上にあがり母が見たのは、市中心部の上を煙と雲が覆い、一面火の手が上がっている予想もしない光景でした。煙と火炎の真ん中には3女・操と4女・敏子が通う市立第一高等女学校があります。敏子は1年生、学徒動員で爆心地近くの建物疎開にあたっているはずでした。

火焰に追われ母は、わたしを抱いて牛田山に逃げました。自宅にいた祖父と操、出勤していた父、長女、次女も山に避難してきました。敏子が戻ってきません。小学生だった長男と次男、学校にあがる前の5女、6女は広島市から遠く疎開していて難を免れました。

翌朝、父と長女が敏子を探しに山を下りました。市内は、どこも瓦礫の山と血にまみれた被災者と死体と…、生き地獄でした。焦熱を避けようと川に飛び込んだ女学生の死体がびっしりと並んだ川岸もありました。貯木場は、浮いた死体で埋まっていました。翌日も次の日も…、ついに敏子は見つかりませんでした。

わたしは、被爆で頭部が腫み、目、鼻、口だけ出して包帯でグルグル巻きにされ、周囲で息絶えていく大人と同じように、間もなく死を迎えると見られていました。

1歳のそのわたしが、記憶のあるもはずもない被爆体験を語る。不思議に思われるかもしれません。

母は、毎年8月6日、子どもを集め、被爆当時の広島を、涙を流しながら話し聞かせました。時には、祖父、父、姉たちも加わり、それぞれの体験を話しました。あるとき、母に、辛い思いをしてなぜ被爆体験を語るのかと尋ねたことがあります。母は、「あんたらに2度と同じ体験をさせたくないからじゃ」と答えました。

高校生の頃には学校の図書室で写真集や原爆詩集、体験記など読みふけりました。それらが、被爆当時1歳で記憶のあるはずもないわたしの血となり肉となり、わたしの心の体験になったのだと思います。

原爆の魔手は、8月6日、9日の体験にとどめませんでした。放射線による長期にわたる後障害を被爆者の体に刻み付けました。

3番目の姉・操は、結婚して授かった次男・史樹を白血病で亡くしました。

被爆から20年後の1965年夏、当時4歳だった史樹が食欲をなくし操を困らせた症状が、被爆直後、操自身が体験した高熱と歯茎からの出血、口内化膿と同じだったことに驚き、病院に連れていったところリンパ性急性白血病と診断されました。入退院を繰り返す闘病生活のまま史樹は小学校に入学し、あわせて10日ほど通っただけで、献血などの周囲のあたたかい支援のかいもなく入学翌年の冬、7歳で命を落としました。

史樹の死は、被爆2世への原爆の影響として当時、社会問題にもなりました。操も被爆者に発現しやすい肝臓病で56歳の若さで亡くなりました。

被爆者に執拗に付きまとい、とどめを刺すまで苦しめる。

これを非人道といわずして、なんと云えばよいのでしょうか。

間もなく被爆70年になります。

平均年齢が80歳になろうとしている20万人を切った生存被爆者は、大なり小なり障害をかかえています。

病が、被爆によるものかどうか、現代の医学では明確にできず、原爆症の認定を求めて裁判に訴えなければならない事態が続いています。

被爆者が、死に至るまで重い十字架を背負いつづけなければならないのは何故でしょうか。

「ふたたび被爆者をつくるな」という被爆者の心からの叫びに耳を傾け、核兵器のない世界へ確かな一歩を踏み出すことを世界の人々に強く訴えます。